



OECDのオープンサイエンスレポートと日本の現況

文部科学省 科学技術・学術政策研究所

科学技術動向研究センター 林 和弘

オープンサイエンス推進に関するフォローアップ検討会（第4回）

2016年1月28日(木)

OECDレポートの示唆と日本



・OECDレポートは、オープンサイエンスに関して、幅広い観点から現状と課題をまとめており、この、レポートに挙げた点について他国との比較を行うことで様々な示唆を得ることができる。

日本においては、

- ・自発的にオープンサイエンスの可能性を取り込む取組が研究者コミュニティを中心に加速し始めている。(理工系、人社系共)
- ・データ科学研究だけではなく、研究データ共有を研究する研究者、データ科学専攻学部を立ち上げる大学も出始めた。(ROIS、筑波大学、滋賀大学)
- ・クラウドファンディングや日本発のOA出版者も立ち上がっている。
- ・研究助成団体は慎重に対応。(JSTのOA推奨(2013))
- ・法規制、産業振興の観点の取組が弱い。
- ・国際連携の取組の中の日本のプレゼンスはまだ弱い。

オープンサイエンスイベント例



講演シンポジウム
HORIZON2020によるオープンアクセス政策と
オープンサイエンスの国際的課題
— 学術研究における日本の共通課題と大学図書館の役割 —

1日 10/13
「ヨーロッパのオープンアクセス政策と大学図書館活動」
「日本のオープンアクセスと大学図書館の国際的課題」

会場 神戸大学百年記念館(神大会館) 六甲ホール

第2回 SPARC Japan セミナー2015
(オープンアクセス・サミット2015)

「科学的研究プロセスと研究環境の新たなパラダイムに向けて - e-サイエンス、研究データ共有、そして研究データ基盤 -」

OPEN International ACCESS WEEK "Open for Collaboration"

日 期：平成27年10月21日(水曜日) 10:15-17:45
場 所：国立情報学研究所 12階 1206, 1210会議室
基調講演：Mark Parsons (Secretary General, RDA)
"Open Data is not Enough!"
URL：http://www.ia-w.org/event/271021open15/11.html
申込期間：10/16(日) 20:00 - 10/20(木) 23:59

第14回東京大学ホームのミツガイ
オープンな知がイノベーションを生む
オープンサイエンスの潮流と図書館の可能性

講師 林和弘 × 有田正規

生員直人

10/17 13:00-15:00

研究者向けソーシャルメディアサービスの可能性
2016年1月19日(火) 13:00-17:00

NII SPARC Report

【オープンサイエンスデータ推進ワークショップ】
プログラム

日時：2016年11月11日(金) 10:00-17:00
会場：京都大学
http://www.kyoto-u.ac.jp/~open-science/

プログラム(11/26 案)

第2回オープンサイエンスデータ推進ワークショップ
— 研究データの保存と公開 —

日時：2016年12月1日(日) 10:00 - 17:00 (聴費無料) 19:00-20:00
12月1日(火) 19:00-21:00

場所：京都大学理学部研究科セミナーホール
http://www.kyoto-u.ac.jp/~open-science/kyoto-u/rdc/rapid_data.html 伊勢丹豊香寺10F
京都大学産学融合研究推進センター
CODATA Data System (オンライン)

共催：京都大学産学融合研究推進センター
ICSI-SciLife Data System (国際科学データ連携センター)
京都大学産学融合研究推進センター

ワークショップ世話人：宮崎成徳(産学連携) (京都大学理学部) / 藤田浩一(産学連携) (京都大学理学部)

趣旨：京都大学がこの秋より、学位論文に加え、科学研究の成果の基盤となるデータも論文と一緒に保存することを実現しました。既に公開されているデータは、定額設定される大学・研究機関も複数あると見られる。研究者一人一人のデータも、個々の研究者・研究機関によって公開される可能性がある。従って、論文の保存だけでなく、適切な形で公開とセットにすることにより、確かな公開性を求める。

本日は行った初回のこのワークショップでは、オープンサイエンス、オープンデータについて、基礎・応用両面から一般的な話から、具体的な話を聞いた。それを受けて、現地のデータセンターも参加して行うためのシステム構築や、データ共有に適切な方法 (Data Access / Data Store) を話し、論文データ共有を行うべきと我が国に於ける連携状況などを共有した。

今回は、現実の問題となりつつある研究データの保存と公開の問題とその解決方法、保存データの活用などになる基盤的話をし、具体的な取り組みについても具体的な提案と議論を行う。

CODATA

第2回オープンサイエンスデータ推進ワークショップ
— 研究データの保存と公開 —

日時：2016年12月1日(日) 10:00 - 17:00 (聴費無料) 19:00-20:00
12月1日(火) 19:00-21:00

場所：京都大学理学部研究科セミナーホール
http://www.kyoto-u.ac.jp/~open-science/kyoto-u/rdc/rapid_data.html 伊勢丹豊香寺10F
京都大学産学融合研究推進センター
CODATA Data System (オンライン)

共催：京都大学産学融合研究推進センター
ICSI-SciLife Data System (国際科学データ連携センター)
京都大学産学融合研究推進センター

ワークショップ世話人：宮崎成徳(産学連携) (京都大学理学部) / 藤田浩一(産学連携) (京都大学理学部)

趣旨：京都大学がこの秋より、学位論文に加え、科学研究の成果の基盤となるデータも論文と一緒に保存することを実現しました。既に公開されているデータは、定額設定される大学・研究機関も複数あると見られる。研究者一人一人のデータも、個々の研究者・研究機関によって公開される可能性がある。従って、論文の保存だけでなく、適切な形で公開とセットにすることにより、確かな公開性を求める。

本日は行った初回のこのワークショップでは、オープンサイエンス、オープンデータについて、基礎・応用両面から一般的な話から、具体的な話を聞いた。それを受けて、現地のデータセンターも参加して行うためのシステム構築や、データ共有に適切な方法 (Data Access / Data Store) を話し、論文データ共有を行うべきと我が国に於ける連携状況などを共有した。

今回は、現実の問題となりつつある研究データの保存と公開の問題とその解決方法、保存データの活用などになる基盤的話をし、具体的な取り組みについても具体的な提案と議論を行う。

総合地球環境学研究所

研究者向けソーシャルメディアサービスの可能性
2016年1月19日(火) 13:00-17:00

NII SPARC Report

見通し



・ネガティブ

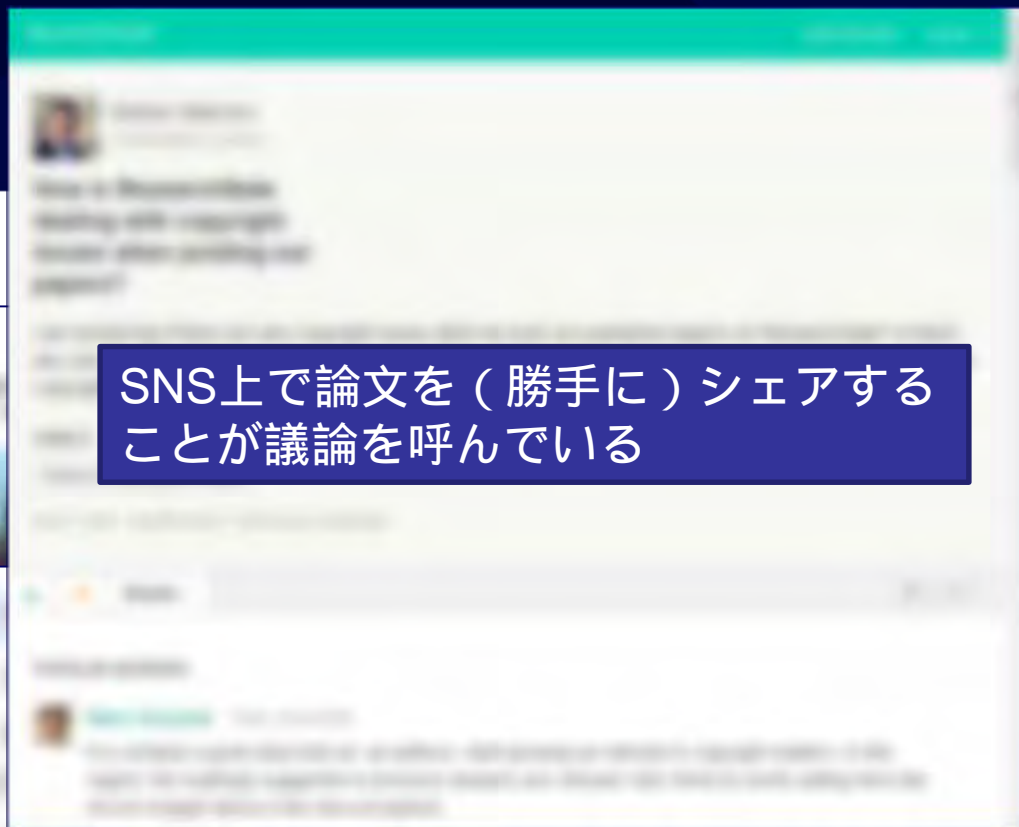
- ü 局所的にはすでに欧米追従の様相(exデータジャーナル)
- ü 既存の根強い慣習を変える難しさ(含む法改正)

・ポジティブ

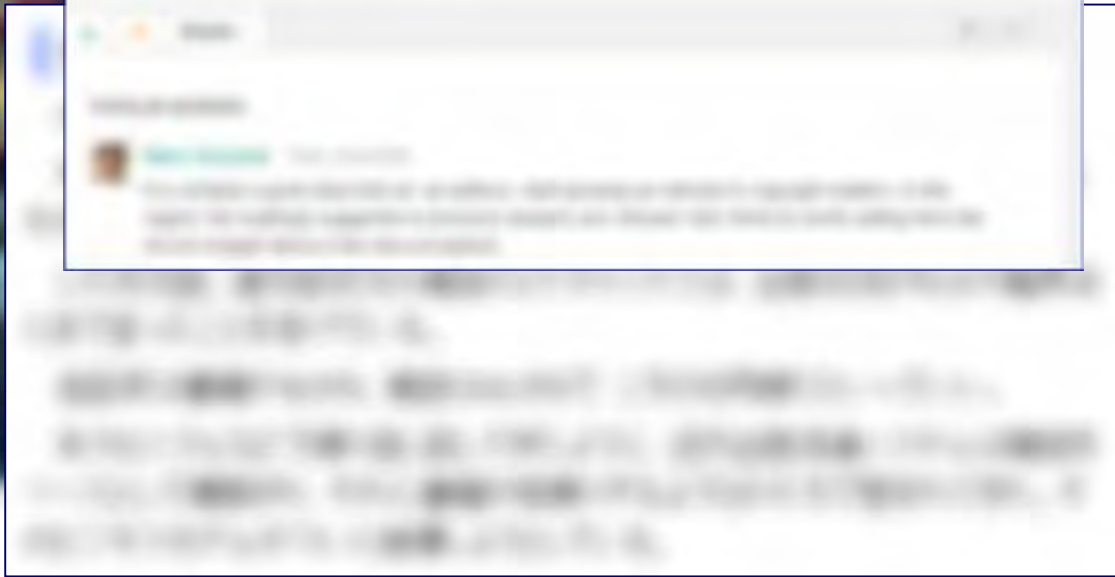
- ü 自発的に動くコミュニティは(すでに、新たに)様々に存在
- ü 学術情報流通ビジネスの新展開はチャンス
- ü 日本が初めて新しい「科学」の在り方の開発に本格的に参画できるチャンス(cf 明治の科学の輸入)

最近の事例

ゲームチェンジの兆し



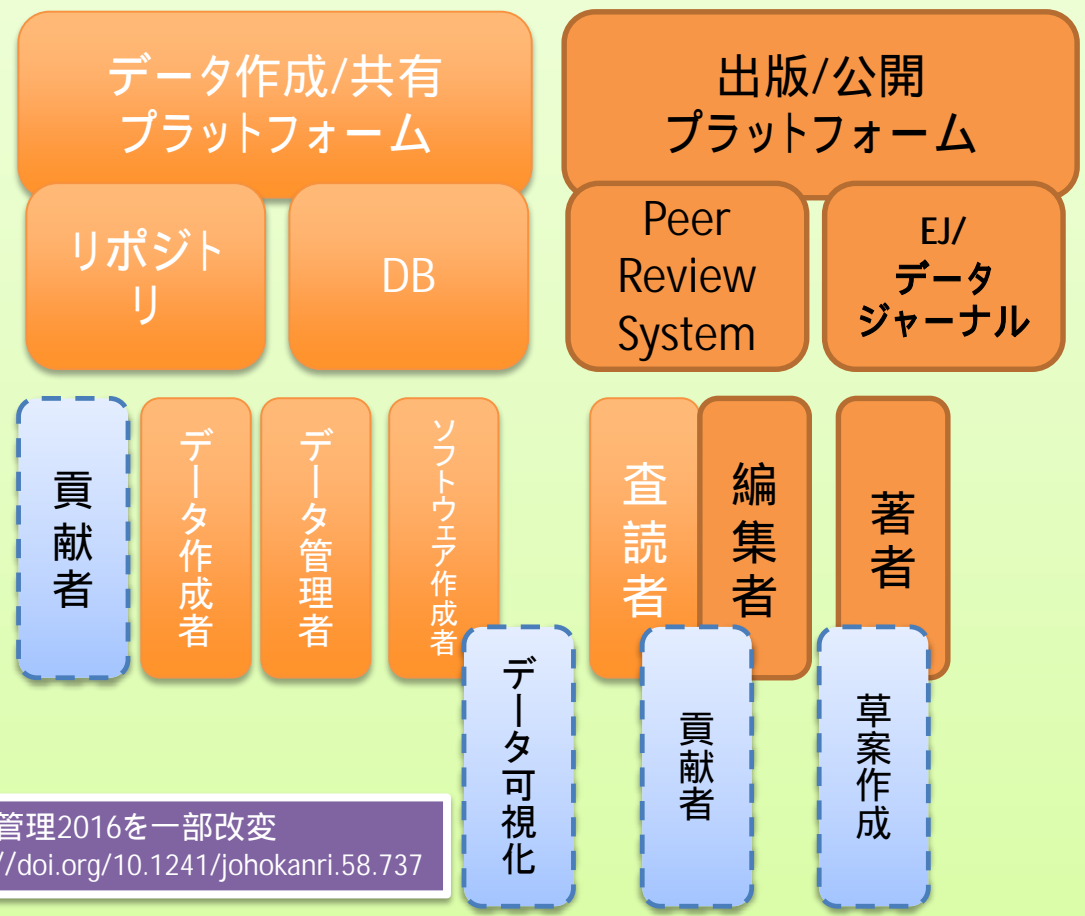
SNS上で論文を（勝手に）シェアすることが議論を呼んでいる



<http://jp.wsj.com/articles/SB10519349150193173538704581499900801192030>

<http://d.hatena.ne.jp/OdaMitsuo/20151201/1448895608>

- 確立
- 実装
- 検討



情報管理2016を一部改変
<http://doi.org/10.1241/johokanri.58.737>

← より上流、多様な貢献者の捕捉

識別子による管理

(DOI, ORCID等)



新しい資金獲得の仕組み

学術システム

SNSの拡張

新しい出版、情報共有の仕組み

新しいインパクトアセスメントと評価への応用

- 確立
- 実装
- 検討

研究プラットフォーム

(研究活動マネジメント、トラフィック管理、ログ、メトリクス)

研究が加速、効率化し、研究者に限らない貢献者が見える仕組みとサービス

着想、研究費調達、人材獲得、執行、管理プラットフォーム

データ作成/共有プラットフォーム

出版/公開プラットフォーム

ツール/サービス



リポジトリ

DB

Peer Review System

EJ/データジャーナル

貢献者

貢献者

貢献者

コンセプト化

初期分析

貢献者

データ作成者

データ管理者

ソフトウェア作成者

査読者

編集者

著者

資金調達者

手法開発

調査

プロジェクト管理

テスト

情報管理2016を一部改変
<http://doi.org/10.1241/johokanri.58.737>

データ可視化

貢献者

草案作成

より包括的、トレーサブルに把握

より上流、多様な貢献者の捕捉

次世代の科学研究成果のフェアユースとは



2014年度の報告書の反応も併せた上での示唆

- ・「多様なステークホルダー」が集まり、
- ・十分な「対話を繰り返す」ことで、
- ・「オープンサイエンスの可能性」を前提に、（特に研究成果の共有の新展開）
- ・「次世代の科学研究成果のフェアユース」に関するコンセンサス(文化)作りと、
- ・それに応じた「法規制ならびに産業作り(に係る政策)」が必要。